

『秘日記』から見た安政江戸地震

弘前大学大学院人文社会科学研究所* 白石 睦弥

The damage of Ansei-Edo earthquake from “Hinikki; the secret diary”

Mutsumi SHIRAIISHI

Graduate School of Humanities and Social Sciences, Hirosaki University

1 Bunkyo-cho, Hirosaki City, Aomori 036-8561, Japan

§1. はじめに

嘉永・安政期は日本各地で大災害が頻発した時期である。安政江戸地震直前の大きなものだけ挙げてみても、以下のようなことになる。

嘉永六(1853)年の有珠山大噴火、同年二月の小田原地震、五月には江戸城の西丸が焼失する。翌嘉永七(1854)年(=安政元年)には、六月に近江国を中心とした大地震、十一月に『稲むらの火』で有名な安政東南海地震と津波が発生する。この年には江戸浅草で大火もあった。そして、翌安政二(1855)年十月に安政江戸地震が発生する。これらの災害に関する詳細な情報はいち早く地方へも伝えられ、社会不安波及の一因ともなった。

本稿では、嘉永・安政期の社会情勢と安政江戸地震について概括した上で、弘前市立弘前図書館蔵岩見文庫「秘日記」の紹介と、その中から窺い知ることのできる被害情報を含む災害情報について述べることにする。

§2. 嘉永・安政期の社会

嘉永・安政期の日本は、諸研究で「内憂外患」という言葉に集約されるように、相次ぐ事件・外圧・変事、また社会不安などの諸状況により、大きな変化が予測される時期であった。幕府だけでなく、社会全体が混乱と不安そして緊張を高めていたのである。

このような中で、民衆に「世直し」・「世直り」といった気運が高まり、「ええじゃないか」などの騒動へつながっていった。

2.1 弘前藩領と北方の様子

嘉永・安政期における弘前藩領内もまた治安悪化が進み、社会情勢は不安定であった。「秋田長面派、留、異名稲妻」らの犯罪者集団が秋田藩領から弘前

藩領へと藩境を越えて跳梁跋扈し、弘前藩側はほとんど対処できない状態であった。松前にいたっては出稼ぎの大工がロシア人にさらわれる事件などが発生し、その情報はいち早く弘前藩領内へも伝わった。

嘉永末年のペリー来航や各災害の情報に関しては、金木屋(註1)などが情報を収集しており、それらの記事の中に「未曾有」・「前代未聞の大変」・「開闢以来」などという文言を読み取ることができる。幕末にいたり、北辺においても社会不安や対外危機意識が高まり、治安などの面で藩の統治体制は脆怯化していた。

また、ここに至るまでには、天保の飢饉に十代藩主であった信順の浪費が加わり、藩財政は逼迫していた。安政江戸地震発生当時、信順は既に隠居し、藩主は十一代津軽順承となっていたが、おそらく前代から続く派閥抗争もまだ尾を引いており、財政についても改善の余地が無かった。また、弘前藩を含む東北諸藩は蝦夷地警備の負担を強いられており、その影響も大きなものがあった。安政二年の地震前には「若殿様」と呼ばれた順承の養子承祐が夭折しており、弘前藩もまた「内憂外患」の事態に直面していたのである。

2.2 弘前藩江戸屋敷

諸大名が江戸に多くの藩邸を所有していたことはよく知られている。基本的に江戸藩邸は上・中・下の三種類があり、拝領されたそれらの屋敷の他に、抱屋敷を所有する場合も多かった。上屋敷は藩主やその家族が住む公邸、中屋敷は隠居した藩主や嗣子などの住居であるとともに、上屋敷が罹災した際の避難邸宅として利用されることもあった。下屋敷はその立地条件から廻送物資の荷揚地蔵地、また庭園などをしつらえた予備邸宅的な性格を持っていた。安政年間

* 〒036-8561 青森県弘前市文京町1番地

当時、弘前藩の江戸屋敷は以下のように拝領されていた。各屋敷の位置関係については【図 1-1・1-2】を参照されたい。

【史料1】「諸向地面取調書」第一冊(註2)

- 一、上屋敷 本所二ツ目 八千七拾五坪
津軽越中守
拝領中屋敷 本所三ツ目通
式千八百七拾坪余
拝領中屋敷 品川戸越村 式千七百坪
拝領中屋敷 浜町 四千五百五拾三坪
拝領下屋敷 北本所大川端 四百九拾壹坪
竹垣三右衛門代官所
抱屋敷柳島村亀戸村入会道壱り十五丁
壱万六千五百五拾四坪
同人同町
抱屋敷 南本所大川端道二十一丁同所下屋敷
共□□壱圓 九拾坪

弘前藩の各屋敷は両国から本所にかけての震度が大きく被害が集中した地域に散在しており、安政江戸地震発生時、本所二ツ目の上屋敷に藩主順承、浜町中屋敷に隠居信順がいた。

江戸藩邸は「御殿空間」と「詰人空間」(註3)から成り、「御殿空間」はさらに奥向と表向に大別された。藩邸の外周は表長屋で囲まれ、また、「詰人空間」と「御殿空間」は板塀などではっきり遮断されていた。この特徴は後述の「御上屋鋪惣御絵図面」(【図2】参照)にもあらわれている。また、表長屋は外部から「御殿空間」の様子が確認されないためと、防御的な意図で敷設され、初期の江戸屋敷には石垣が見られた事実からもこのことは理解されよう[小泉(2004)など]。

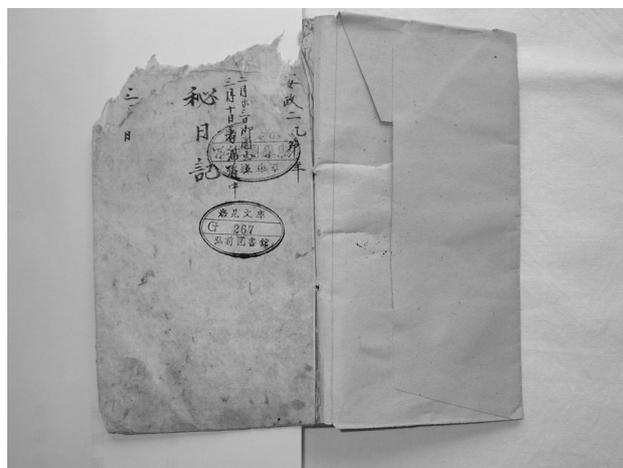
さらに、表長屋の大きな役割は江戸在府藩士の収容であった。在府藩士の人数は把握されていないが、後述する弘前藩邸の被害者層からも分かるように弘前藩邸には藩士の家族が表長屋に大勢居住していた。「秘日記」の記録者や同役の者たちが屋敷外に止宿していたことから見ても、藩邸の表長屋は許容人数一杯だった可能性が高く、弘前藩における人的な被害が大きかった理由のひとつと考えられる。江戸地震発生は深夜のことであり、藩士らとその家族は表長屋でそれぞれ休んでいた可能性が高い。

§3. 「秘日記」について

ここでは、「秘日記」の史料的性格と、その内容について説明する。

3.1 「秘日記」の史料的性格

弘前藩の江戸在勤藩士の生活については、弘前市(2000)に収録されている「添田儀左衛門日記」や、「旅籠帳」によってそのつつましい生活の様子が既に知られているところであるが、今回紹介する弘前市立弘前図書館蔵岩見文庫「秘日記」もまた、弘前市立弘前図書館の目録にも示される通り、弘前藩士の江戸在勤中の日記である。残念なことに史料から記録者の名前を読み取ることは出来ないが、彼は江戸勤番のために、安政二年二月二十三日(1855, 4, 9)に「御国(弘前)」を出立し、三月十日(1855, 4, 26)に江戸へ到着したことが記されている。



▲参考写真 「秘日記」内表紙(【史料2】)

【史料2】「秘日記」内表紙

「安政二乙卯年
二月廿三日御国出立
三月十日着、滞府中
秘日記
(欠損)日」

この日付に照らしてみると、「弘前藩庁日記 江戸日記」(以下、「江戸日記」と記す。)に【史料3】の記述がある。

【史料3】「弘前藩庁日記 江戸日記」

安政二年三月十一日(1855,4,27)条
同十一日 甲戌 晴 南風烈、申ノ刻前止、
当番 近藤太郎左衛門
(中略)

- 一、御目付申出候掃除小人、富田村友平・中村ノ藤太郎・柏木町村久四郎儀、江戸交代登被仰付、去月廿四日、御国許出立、昨十

日到着之旨、達之、
(中略)

一、御目付申出候大組足輕、米嶋子之作・秋元
萬吉郎・成田甚左衛門・奈良源次郎・小田桐
永吉・桜庭六左衛門・桜庭宇吉、御留守詰登
被仰付、去月廿四日、御国許出立、只今到着
之旨、十日付二而、達之、
(後略)

ここに挙げた掃除小人三名・大組足輕七名のうち
の誰かが「秘日記」を記録したと推察されるが、断定
はできない。史料の記述には地名などの端々に「八
代シカシ(八代洲河岸)」のように方言が見られる。

日記の記述は在府中の安政二年三月から年末ま
でだが、その中でも安政江戸地震と、その被害記録
が大きな割合を占める。【史料 4】には、側役衆に呼
び出されて御用を言いつけられ、「御用書」や「宿状」
といった書類を作成していることが記されており、この
ような書類を作成する際に弘前藩邸内の情報を入手
できたと考えられる。その他にも自分の足で歩き現場
で「跡見」をして得た情報、弘前藩邸内の被害や他藩
邸の被害、また町方の被害についても比較的詳細な
記述が見られる。【史料 5】①には、兄久吉のところへ
江戸絵図を借用に行ったことが記され、彼はどうやら
この絵図を手に入れ跡見を行ったものと考えられる。
跡見を行った地域は【表 1】の通りである。

記録者の記した情報の中には、災害情報に限らず
上級の藩士しか知りえないようなものが含まれている。
これは、彼の「兄様」久吉が弘前藩上屋敷詰の藩士
であり、この「兄様」から弘前藩内部の様々な情報を
得ていたためと推察される。「兄様」が弘前藩の上屋
敷詰であったために、下級藩士であろう彼は本来得
ることのできない情報を「秘日記」に記すことができた
のであり、「秘日記」という表題から、それらの中には
当時公開されていなかった情報が含まれていたことは
間違いなからう。

【史料 4】「秘日記」安政二年十月五日(1855,11,14)条

一、同五日、天気、即夜忒度相應尔強く退候
位、同日御側役衆より御呼出ニ付罷出候処、
御用被仰付、同日飛脚立ニ付、御用書ならひ
宿状差出し、同日御用書上ル、

【史料 5】「秘日記」安政二年十月六日(1855,11,15)条

一、十月六日、天気、御屋舗出、①御徒長屋参、
江戸絵図借用、兄様二而、同役并勇吉共老

飯給、夫より本郷并小川町辺江跡見、暮六ツ
時頃罷帰り、②即夜より外江仮宅拵、拙者共
計、夜分同所二十四五日頃迄住居、即夜相
応強く両度相震き、諸人外江立退候、

表 1 跡見の場所と天気

月	日	天気	跡見
10	2		
10	3	天気	
10	4	天気	
10	5	天気	
10	6	天気	本郷 小川町
10	7	天気	小川町～ 青山 霊岸島
10	8	曇り、夜分よ り雨降	
10	9	天気	愛宕下
10	10	天気	麻布～ 三田・白銀・高輪
10	11	天気	千住 三之輪・吉原・浅草
10	12	天気	本所・柳原～深川・大嶋丁 扇橋
10	13	(のち)雨	下谷～ 池端・本郷・牛込・小石川
10	14	雨天	
10	15	天気	本所・深川 上野下

「秘日記」が一次史料ではないということも、留意し
なければならない点の一つである。例えば、【史料 5】
②は安政二年十月六日条であるが、仮宅をつくり「十
四五日頃迄」そこに住居したというように、後のことま
で記してある。このようなことから、おそらくは日々記
的に毎日記していたものが元帳としてあり、それを編
集しなおした形で「秘日記」が成立したのではなから
うか。

3.2 「秘日記」の諸相

「秘日記」には安政江戸地震の情報以外にも、
様々な記事が書き留められている。江戸に到着する
と、止宿予定の「屋治郎兵衛方」が九日前の火災で
焼失しており、仮宅に止宿したこと【史料 6-1・6-2】な
ど自らの身の事情や、交友関係、両国橋の普請
【史料 7】などの江戸の様子にも触れられており、弘前

藩士の在府日記として読み解くことも出来る。また、北方警備【史料 8】や承祜の葬送【史料 9-1・9-2】などについても記述が見られ、記録者の関心が対外関係や藩内の政治的・軍事的な事情に向けられており、そのような情報を意識的に収集し記していたと考えられる。特に蝦夷地警備に関しては、「仙台」・「佐竹」・「南部」・「松前」など他家の警衛地の覚書まで記されている。

【史料 6-1】「秘日記」前書

安政二乙卯年三月十日、江戸馬喰町三丁目幸手屋治郎兵衛方江罷越候得者、同朔日小網町よりの出火ニ而同人類焼、深川熊井町仮宅ニ罷有候ニ付、同所ニ止宿、

【史料 6-2】「秘日記」

安政二年五月二日(1855,6,15)条一、五月二日宿治郎兵衛本宅出来、引移候事、

【史料 7】「秘日記」安政二年四月(1855,5)条

一、同年四月、両国橋掛替ニ取懸る、

【史料 8】「秘日記」

安政二年四月十四日(1855,5,29)条一、四月十四日、松前蝦夷地御警衛被仰付口達之覚
今度箱館表松前地并蝦夷地御警衛向之儀場所割等別紙之儀者差向候義ニ付、(後略)

【史料 9-1】「秘日記」

安政二年八月九日(1855,9,19)条一、同日夕、早御飛脚着
若殿様去月廿八日甲下刻、
御逝去之段被仰越候由(後略)

【史料 9-2】「秘日記」

安政二年八月十四日(1855,9,24)条同日、若殿様御逝去ニ付、御触出左ニ、
覚
若殿様去月初旬より御感冒御熱気強く一通之御外邪に不成御座(後略)

北原(2000)に示されたように、興味や関心によって記される内容や跡見の精度が異なるとすれば、「秘日記」は個人的な事柄についての記事は数行程度で終え、政治的・軍事的に重要であると思われること

については大きく紙幅を割いており、記録者の関心が向かう先は明確である。彼は下級藩士でありながら弘前藩や日本の行く末について憂えていることが分かり、それは幕末という寧日のない時代の投影とも考えられる。

§ 4. 「秘日記」と 安政江戸地震

「秘日記」はもう一つの側面から読み解くことができる。「秘日記」には、安政江戸地震の被害情報が多く含まれており、弘前藩の安政江戸地震の史料としては「江戸日記」と並び、重要な史料である。

4.1 安政江戸地震

ここでは、安政江戸地震について総括的に考えてみたい。中央防災会議(2004)によると、安政江戸地震は安政二年十月二日(1855,11,11)、夜四ツ時(午後十時)ごろに発生した。最大の被害域が江戸市中の中心部にあったことから、内陸直下型の地震であると考えられており、震央は被害の中心から推定して、東京湾北部から江東区付近(北緯 35.65 度、東経 139.8 度)、規模は M7~7.1 と推定される。青山、麻布、四谷、本郷、駒込辺りの台地は V、皇居外苑、神田小川町、小石川、下谷、浅草、本所、深川辺りは VI であった。後述する安政東海・南海地震と比較すると地震の規模は小さかったが、都市直下型であったことと、発生した場所が江戸という埋立地や低地、湿地の多い場所であったことが災いし、被害を大きくした。実際、埋立地や低地の震度は大きく、一方台地や砂州の部分では被害が小さかった。東京駅の東側の震度が小さいのは、ちょうど東京駅周辺が断層の境目であることによる。

地震当日の天気は薄曇り、風は微風であった。火災は三十数か所で発生し、大手町、丸の内、日比谷の一部、京橋、新吉原、浅草、両国、深川などで延焼した。概ね火災は揺れの強いところで発生したことがわかる。しかし、火災の発生した京橋付近は大きな揺れではなく、V 程度と推定される。火は翌日の午前十時ころには鎮火した。

安政江戸地震は都市直下型で深夜に発生したために多くの死傷者を出し、死者数は武士、町人とも合わせて少なくとも 7000 人以上と考えられるが、詳細は不明である。

「内憂外患」の時代に、江戸は壊滅的な被害を受け、この知らせはすぐさま各地へ届けられ、江戸大変は全国へ知れわたるところとなった。社会不安が拡大し、各大名や幕臣、もちろん幕府の財政的負担も大

きなものとなり、外向的な局面を向かえていた幕府にさらなる対応が迫られた。

安政江戸地震だけが直接幕府瓦解の原因とは考えられないが、その一つの要因としてとらえることはできよう。幕府瓦解は一つの原因によるものでなく、様々な要因が複雑に絡み合った結果だからである。逆に見ると、安政江戸地震もまた、地震の規模や被害のみをとらえ一つの災害として認識するよりも、むしろ、幕府瓦解の一要因として、幕府へ与えた影響や各藩の人的被害・財政的負担、人の移動や情報伝播の様子など、それぞれの要素に注目した方がその歴史的意義を明確にできる。

4.2 地震発生時

「秘日記」には、地震発生時の様子が生々しく描かれており、初期微動と主要動の時間差も読み取ることができる。【史料 11】では、記録者が眠る時間にも関わらずまだ起きていたことが記され、意識のはっきりしていた彼は揺れの様子を克明に記憶している。「震動」から「不一通相動」くまでの間に起き上がって帯を締め、大小を手には逃げようとする一連の行動が記されており、P-S時間は10秒程度であろうか。大きな揺れが来てからは、一步も歩くことがかなわず、同僚の大森と二人で覚悟を決めて居室に留まったようだ。外からは「大山を崩ル如」き音が聞こえ、瓦が落ちたり土蔵が崩れる音だとしている。動きがおさまると、彼らは二階にあった居室を下り外へ出てみた。新築であったことが功を奏したのか、止宿所は西に大きく曲がっていたが潰れてはおらず、怪我人も出なかった。

話し合った記録者らは「出火之半鐘」を打ち鳴らした後、まず大川端の屋敷を目指して出発する。止宿所の位置は【史料 6】にある「馬喰丁」と考えられる。「馬喰丁」から「横山町」「薬研堀」「米沢町」、「両国橋」仮橋をわたり、「駒止橋」「大川端通」「藤堂和泉守中屋敷」を通過し川端の屋敷に到着する。たどり着くまでに汚れてしまったのか、屋敷につくと着替えを頼み、すぐに見回りなどをはじめ、その後は上屋敷や三ツ目屋敷へも参じており、忙しく対応に追われた様子が読みとれる。位置関係や移動経路は【図 1】を参照されたい。

【史料 11】「秘日記」安政二年十月二日(1855,11,11)条一、同二日之夜、四ツ半時過と覚へし頃、寝刻未夕不眠内、震動いたし、否哉、起上り帯締め、大小を引提逃去候する内、不一通相動き、二階之障子・襖一時に倒れ、一足歩行不叶、合

役大森勝治郎兩人ニ而、覚悟極メ居留り候処、近所屋根瓦并土蔵壁落る音大山を崩ル如く、其内少し動止、二階を下り外江出候得者、止宿所西ノ方江悉ク相曲り候、然共怪我壺人も無之、咄合之内、出火之半鐘打、夫より着替取仕舞、同宿江戸町湯屋齊藤勇吉・青森米町勝島藤五郎、四人連ニ而、大川端御屋鋪勤番目付和田六郎兵衛方迄心差、横山町薬研堀江出夫より米沢町罷通候処、往来江倒家有之、軒下漸通抜、此年両国橋普請ニ而、仮橋江出候処、欄干六七間落、橋板三四寸位開候場所式ヶ所、東方橋たもと寛く、其時早哉出火数拾ヶ所ニ而、天をこかし白昼の如く、駒止橋より大川端通町家ニ軒往来江倒れ漸通抜、藤堂和泉守様中屋敷裏辻番潰、同所地面四五寸位所々割、内長屋潰、夫より六郎兵衛方江参着替相頼、勇吉・藤五郎附置、御蔵見廻之處、屋根瓦并壁落、御長屋別状無御座、直様兩人御上屋敷駆付、横網通潰家ニ而往来不相成、先道江通懸り候得と、藤堂様通用門并辻番所潰れ、亀沢町通御旗本町家共所々潰有之、御上屋鋪表辻番所潰、番人旁出罷有、夫より西御門江入見候候(ママ)得者、同所より南江通御長屋潰、御仲口より口所(ママ)御用所御台所迄、夫より御休息長屋門潰、奥者御三階下より御請座辺不残潰、南北之往来塞り潰、木柄之上歩行、凶書様江参候処、御玄関前御固メ、上々様御別条無御座段被仰承り、先一安堵仕候処、其方とも無事ニ而早速駆付大慶之旨、御意難有御礼申上、夫より三ツ目御屋鋪見分被仰付候ニ付、右序而兄久吉様迄参候処、御長屋無事、(後略)

4.3 被害から見た安政江戸地震

ここでは、「秘日記」から読み取ることのできる安政江戸地震の被害について、弘前藩邸・大名屋敷・町方の三点から検討していきたい。

4.3.1 弘前藩邸の被害

弘前藩邸の人的被害状況については、かなり正確で詳細な記述が認められる。安政江戸地震において、弘前藩は大きな被害を受けたことが知られているが、「秘日記」は、藩の公式記録である「江戸日記」と比較しても遜色がなく、特に被害者は上・中・下など屋敷ごとに詰合の人々の名前や役職を書き上げており、

八ツ時(午前二時)頃までにお互いに助け合い、潰れた建物に埋まった人々を掘りおこしたものの、怪我人も少なくなかったと記されている。【史料 12】と【史料 13】はそれぞれ「秘日記」と「江戸日記」の被害者書上部分である。

【史料 12】「秘日記」安政二年十月三日(1855,11,12)条
一、同三日、潰御長屋之怪我人取調被 仰付、
兩人同道取調之處、

一、耆人 ○ 御近習坊主 大 高 寿 考
一、耆人 ○ 右 同 福 士 寿 三
一、耆人 ○ 勘 定 人 瓜 田 弁 次 郎
一、耆人 当番 御 医 者 渡 辺 昌 盈
一、耆人 ○ 楠殿用達 西 村 末 吉
(中略)

右者、御上屋敷潰死之面々、○是ハ勤番、
一、耆人 ○ 御台所受払 平 澤 菊 治
一、耆人 ○ 板之間小姓 石 戸 谷 萬 蔵
一、耆人 ○ 御 馬 屋 藤 村 林 太 郎
一、耆人 ○ 右 同 和 徳 村 治 三 郎
一、耆人 ○ 杖突加勢 清 野 鉄 太 郎
(中略)

右者、濱丁御屋鋪潰死、
一、式人 石橋鑽吉郎 母并祖母
一、式人 渡辺新之丞 娘ニ倅
一、三人 藍原勝次郎 倅之妻、次男小兒
一、四人 飯 田 勇 馬 妻ニ弟、子供式人
一、式人 安藤寅太郎 并嫡子
(中略)

右者、三ツ目御屋鋪潰死、
右潰死外之面々者、則夜八ツ時頃迄ニ、互ひニ相救、穿出候得とも、怪我人不少有之、御側役石川藏次郎諸御屋鋪見廻、
(後略)

【史料 13】「弘前藩庁日記 江戸日記」

安政二年十月七日(1855,11,16)条(註 10)

一、去ル二日之夜、大地震ニ付潰死之面々、御目付より取調申出左ニ、

渡 辺 昌 盈
大 高 寿 考
福 士 寿 三
勘 定 人 瓜 田 弁 次 郎
楠美莊司用達 西 村 末 吉
(中略)
濱町

式人 山 澄 清 蔵
右 同 人 母
浅野良蔵娘
菱川裕蔵母

(中略)

三ツ目

木村栄吉妻
倅
桜井市蔵妻
二男

(中略)

八拾人

右之通、御目付取調申出達之、

また、藩邸ごとの被害者の名前などからも、各藩邸の特徴を見ることができる。

上屋敷では、男性の被害者、特に勤番の者が多く見られる。渡辺・大高・福士など、苗字は弘前周辺で多く見受けられる者が多い。浜町中屋敷では同じく勤番の被害者が多いが、上屋敷よりも下位の者が多く亡くなっており、藩士の家族と考えられる被害者が見られる。特徴的なのは三ツ目屋敷の被害者で、殆ど全員が藩士とその家族である。苗字に関しては、多くが国元弘前のものではない。三ツ目屋敷は人的被害の大きかった弘前藩の屋敷内でも最も被害者が多く書き上げられており、おそらく長屋が多く建てられ、江戸で雇い入れられた藩士が家族ごと住み込み、町家に近いような生活形態が見られたのではなかろうか。弘前藩の在府藩士数について明確に記す史料は見出せず、また、在府藩士中における国元の間と江戸の人間の比率についてもわかっていないが、被害者の書上からは、その一端を垣間見ることができる。

この被害者の書上については、飛脚を通して国元弘前へ伝わっており、金木屋又三郎へも伝達されている。金木屋へ伝わった藩邸被害者の情報は姓名など若干の錯誤が見られるものの、災害情報を末端でとらえた記述としてはすこぶる正確であると言えよう。【別表 1】では、被害者の一覧と各史料の整合を試みた。

国元では金木屋をはじめとする富裕な商人層へ「御用金」を申しつけており、八回にわたり国元から江戸屋敷へ「御金」が届けられている【表 2】。国元からの送金には必ず付添者が付けられており、「秘日記」には彼らの名前もその都度書き記されている【史料 14】。震災以前は付添者一名のこともあったが、額面が大きいことと治安の悪化を懸念してか、この頃の付

添は二名である。この総額は 24,650 両と巨額であり、【史料 15】には見られるように、御金の手配は板柳や弘前など国元の商人からの借上金によってまかなわれていた。江戸においても「御手伝い人足」を配置したり、「入札」によって屋敷内の潰れた場所を片づけるなど、出入りの商人らが復興について大きな手助けとなった【史料 16】。

また、屋敷の被害については「江戸日記」の記載と「秘日記」の記載に大きな違いが見られる。「江戸日記」の記載は幕府への届出に記されたものであり、内容については【表 3】を参照されたい。「秘日記」の記載は【史料 11】に見られる部分で、地震当日上屋敷にたどり着いた記録者が西御門から屋敷内へ入り、目にうつった上屋敷の被害状況である。

なお、【表 3】を「御上屋敷惣御絵図面」に示したものが【図 2】であるが、この図でははっきりと長屋の被害が重く記されていることが見て取れる。「江戸日記」では奥向きなどは「所々大破」と記されるが、「秘日記」では同じ奥の被害を「奥者御三階下より御請座辺不残潰、南北之往来塞り潰」など、「潰」という言葉を使用して記している。このような災害の場合、彼が目にした部分だけでこのように大きな被害となることや、奥向きだけの被害が軽くなることはむしろ考えにくく、史料記述の段階で何らかの意図や配慮が働いたと考えることができる。「秘日記」を記すうえでそのような配慮が働いたとは考えられない。弘前藩は幕府へ提出する「御届書」に奥向きの被害を詳しく記さなかったのである。

表 2 弘前藩受取の御金

月	日	御金(単位:両)
10	21	2,500
11	2	2,000
11	5	1,000
11	21	8,000
11	24	3,000
12	5	2,000
12	19	3,000
12	27	3,150
合計		24,650

表 3: 弘前藩江戸屋敷の被害
(「江戸日記」10月10日条「御届書」)

	屋敷	被害箇所	被害の程度	
1	上	表門之両番所	痛損	II
2	上	玄関広間向	破損	I
3	上	書院向	大破	III
4	上	住居向	所々大破	III
5	上	奥向	所々大破	III
6	上	内玄関向	破損	I
7	上	中ノ口并諸役所向	不残潰	V
8	上	表長屋	破損	I
9	上	東通長屋南之方	潰	V
10	上	東通長屋北之方	半潰	IV
11	上	西之方通用門	痛損	II
12	上	西通長屋南之方	潰	V
13	上	西通長屋北之方	半潰	IV
14	上	北通長屋	痛損	II
15	上	内長屋七棟	痛損	II
16	上	土蔵拾ヶ所	大破	III
17	上	厩	大破	III
18	濱	門番所	大破	III
19	濱	玄関	潰	V
20	濱	書院向	大破	III
21	濱	出羽守住居向半潰	半潰	IV
22	濱	内長屋七棟潰壱棟	大破	III
23	濱	土蔵四ヶ所	大破	III
24	三	表通長屋東之方	潰	V
25	三	西之方	大破	III
26	三	内長屋七棟	潰	V
27	三	土蔵壱ヶ所	痛損	II
28	大	表長屋壱棟	破損	I
29	大	内長屋壱棟	破損	I
30	大	土蔵七ヶ所	大破	III
31	亀	土蔵壱ヶ所		
32	亀	塗屋壱ヶ所		

潰・潰懸	V
半潰	IV
大破	III
痛損	II
破損	I

【史料 14】「秘日記」

安政二年十月廿一日(1855,11,30)条
一、十月廿一日、天気、御用書式封上ル壺封者
石川蔵次郎殿ヲ以出、同日御金式千五百両
着、御徒目付山本市郎・足軽目付横山喜兵
衛、付添登り、

【史料 15】「秘日記」安政二年十月六日(1855,11,30)条
一、同六日、天気宜、(中略)尚又、地震ニ付御
国表御金手配、板柳井角屋□□(虫損)衛・
弘前大津屋九左衛門、三千両宛并、冬買上
方町人両三人ニ而式千両都合八千両御借上
ニ相成候よし共申参候事、

【史料 16】「秘日記」安政二年十月二日(1855,11,11)条
(前略)同廿日頃迄、諸御屋敷共往来片付不申、
潰所之上通路の事ゆへ、御出入町人共、御手
伝人足差出、塵芥取片付、其上潰所入札之上、
取片付ニ相成、十一月十日頃迄ニ而、漸々手
広に相成、穿建長屋御手配ニ相成、(後略)

4.3.2 大名屋敷の被害

北原(2003)では『藤岡屋日記』や諸藩記録などの史料から、安政江戸地震における藩ごとの被害者数が一覧として示されている。「秘日記」でも 160 をこえる藩邸について、被害の軽重や死者数を地区ごとに書き出しており、各地区の被害を記している部分は、本所・深川辺の被害が大きいなど、これまで把握されてきた被害状況と大差はない。しかし、各藩邸の被害については、「秘日記」と従来示された被害状況のデータが合致したのはむしろ少数で、合致した藩邸についても「秘日記」では他藩邸の被害を過重に見る傾向が強いように見受けられる。【史料 17】に各地区や大名屋敷の被害について書き上げられている部分を一部掲載した。

また、地震に伴う火災に対し大名火消しが出動しないなど、普段の防災システムが作動しなくなった様子が見受けられるが、【史料 18】では藩士らが消火作業を自主的に行っている。弘前藩上屋敷のある本所は多くの火災が発生し、相当近所まで火の手は迫っていたと考えられ、彼らの働きにより上屋敷の延焼は免れた。

安政江戸地震に際して火災の発生した屋敷や地区を示したものに『安政地震焼失図』がある。この図はトレースされたものが東京大学地震研究所(1982)に掲載されており、地区ごとに二十三枚が存在し、こ

のうち「秘日記」に焼失と記載されている地区を描いているものが十六枚ある。【図 3】は整合の一例である。単純に考えると七割程度の一致率であり、武家方の死者数や家屋被害の一致率と比較すると高い数値である。

【史料 17】「秘日記」安政二年十月二日(1855,11,11)条
十月二日、地震ニ付、御府内痛所并即死左ニ、
一、御本丸御玄関前并奥向所々大破之由、内
外土墾崩、御門之者壁落、石垣寛き、堀添石
垣所々崩れ、[和田倉(抹消線アリ)]桜田御
門落、西御丸矢倉壺ヶ所崩候、其外御矢倉
大体壁落申候、夫より常盤橋御門内より寅ノ
御門迄、丸之内大名衆屋敷之殊之外相震出
火所々有之、
一、表長屋角少し潰、
神田橋内酒井左衛門尉
一、脇長屋潰、余残、死亡三四人位、
神田橋内小笠原左京太夫
一、表門并物見残、余者向屋敷共惣焼、死亡
百式三拾人、女中三拾三人、後ニ男女共
千人余許有之、

大手向酒井雅楽頭
一、惣焼、死亡式拾七八人位、
辰ノ口北角森川出羽守

(中略)
一、浅草見附内より筋違見附・日本橋迄、夫より
江戸橋・境町通・塩町・石(穀)町辺町々、相
應震き強、土蔵・屋根瓦落候得とも、多分者
昨年之焼ニ而新家勝ニ付潰家不足、尤神田
少々震弱く様子見得候得共、古家裏店相潰、
其外何方茂大破・曲り家多し、

(中略)
一、浅草見附より千住迄之内、花川戸辺迄(ニ
テ)往来之内、格別潰家無之、裏店多分潰、
同所より新鳥越出口迄表裏共大半相潰、浅
草黒船町より駒形迄焼失、花川戸より猿若町
之芝居焼る、夫より馬道・田町・吉原迄一圓焼
失、死亡不少、尤吉原郭内ニ而、遊人之外千
七百人位死亡之様子、同所田甫六郷筑前様
表長屋残り内惣潰、夫より簀輪通三ヶ一潰、
坂本壺式丁焼ル、小塚原入口壺丁四方焼失、
同所并千住宿往来左右ハ稀ニ潰家有之、裏
通朽家之分者大半相潰、死亡式百人余有之、
同所御本陣大破、定宿伊勢屋甚兵衛表通不
残潰召使壺人死亡、同所右変事に付、馬継

立不相成、同十二日迄下り之外、往来差留ニ相成、
(中略)

- 一、表門潰内長屋所々潰死亡五六人
浅草鳥越松浦壱岐守
- 一、外廻長屋壁落大破、浅草鳥越池田内匠頭
- 一、外廻宜内所々痛 向柳原堀石見守
- 一、脇長屋不残潰死亡拾四五人
向柳原藤堂佐渡守

(中略)

右之外、書加江無之大名衆者、格別痛無之、然共何方茂屋根瓦土塀様々痛有之、前書大痛之場所辺ニ有之候中・下屋敷者別而多潰、其外旗本屋鋪夥敷潰候得共相略、常ニ出火無之古家場所者、町家たりとも潰家多、土蔵者何方与而□(モ)壁震落大破、随而出火之場所者残土蔵一切無之焼失、尚又潰不申共、御府内中家ハ大体曲り候ゆへニ、後往来左右□□はり・柱ニ而、夜分往来甚難渋いたし、尤田舎江出、東海道金川宿・奥州道中者栗橋土居所々崩候得共潰家無之、下総者中川辺迄少々震き、岩槻城下者土蔵壁落ち、甲州道中者板橋辺迄少々震き候事之由、

(後略)

【史料 18】「秘日記」安政二年十月二日(1855,11,11)条

(前略)然ニ御向屋敷裏通并石原町、前町、表御門通、西方一丁先御旗本屋敷、右四ヶ所之出火ニ而御上屋敷危見廻候得者、御向屋敷板塀江早や燃移ル計ニ付、又々申上乍処、直様御供待中防方被仰付候得共、一同之変ニ付、潰込之人々穿出ニ取懸、火事場ニ防之者老人も無之、御徒七八人并両目付三人御屋敷守鳶老人上総小人老人掃除小人壱拙者とも都合拾六人ニ而防消、夫より太夫江出候、(後略)

さらに、武家地の被害情報については【史料 19】に興味深い記述が見られる。諸大名の被害を書き上げた後に、その他にも様々な風聞はあるが「実説」がないためこれを記さない旨と、自ら記した屋敷の被害についても、死者数については千人のところを 7, 80 人程度と報告しているため「実意」がわからない旨が記されている。要するに、武家は自藩の被害について正確な情報を幕府に提出していない疑いがあるということである。弘前藩では藩邸内の人的被害情報は

正確に把握していたと考えられ、他の記録類においても同じ死者数が書き上げられているが、自藩記録と他の記録類で記される被害者数が大幅に異なる藩もある。また、先の通り弘前藩でも屋敷の被害について詳細には報告しておらず、武家の被害記録は、簡単に外部へ知らせる性格のものではなかったと考えられる。少なくとも、「秘日記」の記録者はそのように考えており、そのことをはっきり記してあるために、この史料は「秘日記」と題される必要があったのではないだろうか。

【史料 19】「秘日記」安政二年十月二日(1855,11,11)条

(前略)

- 一、御大名之内、立花出雲守様隠居・酒井雅楽守様奥方潰死、其外怪我之御方茂有之、水戸臈中御用人藤田清之丞・戸田忠大夫潰死、[松平下総守様御嫡子・民部大輔様、三日迄逝去(抹消線アリ)]、小笠原信濃守様奥方潰死、其外色々風聞有之候得とも、実説無之ニ付相略、前書屋敷之死亡茂大体取包置、聊ニ申唱公辺江御達茂、千人有之候得者七八拾人より書出不申候ニ付実意不相分、小川町辺大名衆并御旗本屋鋪ニ而壱万人程茂有之由、別而焼失之屋敷者死亡多、俵詰ニいたし取賦候処より、寺ニ而茂員数不相分由、大名衆者中・下屋鋪所々ニ有之処、上屋鋪ニ死亡無之共中・下屋敷ニ不少御座候、(後略)

4.3.3 町方の被害

「秘日記」では町方の被害について番組ごとにまとめて町名・男女別死者数・家屋土蔵被害数などを記している。町方の被害者数は男女ともに震災直後に行われた幕府第一回目の被害調査と大きな差異は見られない。これは、家屋や土蔵の被害についても同様である。ただし、例外的に吉原の被害人数は第二回目の調査に合致する【別表 2・グラフ 1】。災害時に記される情報は殆どが似かよったものになるという特徴を踏襲しているとも言えよう。

なお、付け加えれば「秘日記」において人数は人別帳に記されている者のみの記載だと明言されており、奉公人などこの数字に加えられていないものがあることも記されている。

【史料 20】「秘日記」安政二年十月二日(1855,11,11)条

- 一、御府内町々死亡之者、番組町内より御達之表左ニ、

老番組、本石丁三丁目・本銀丁・鎌倉町・新革丁・本両替丁・品川丁・室町・本船丁・按針丁・岩附丁・鉄砲丁・大伝馬丁・小網丁・箱崎丁・新材木丁ニ而、

メ変死八拾老人、内男四拾老人、女四拾人、潰家百三拾三軒、潰土蔵貳拾三ヶ所、
一、貳番組、葺屋丁・堺丁・新乗物丁・橘丁・久松丁・田所丁・神田紺屋丁・紺屋丁三丁目・横山丁貳丁目・米沢丁・高砂丁・小伝馬丁・馬喰丁・神田松枝丁、

メ変死八拾九人、内男参拾老人、女五拾八人、潰家壹百八拾五軒与六拾老棟、潰土蔵五拾七ヶ所、
(中略)

一、番外新吉原

メ変死六百三拾人、内男百三人、女五百貳拾七人、潰家五軒、潰土蔵壹ヶ所、
一、番外品川宿

メ変死六人、内男三人、女三人、潰家拾八軒、潰土蔵無之、

組々番外

惣メ変死三千八百九拾五人
内男千六百拾六人

女貳千貳百七拾九人

潰家老万四千三百四拾六軒と長家作千七百貳拾四棟、潰土蔵千四百四ヶ所、
焼失場所、凡長貳里拾九町余、巾平均貳丁程、
(後略)

§5. おわりに

本稿では「秘日記」から、安政江戸地震の被害について従来の研究成果やデータと比較を行った。この比較からは、「秘日記」の記録者に町方の被害についての幕府調査の情報が比較的正確な数値で伝わっていることと、また一方では武家方の被害情報は殆ど正確に伝わっていないという傾向をつかむことができる。武家方の情報の中でも、自藩(弘前藩)記録と火災情報についてはある程度従来のデータと合致した情報が記されている。しかし、武家方については簡単に正確な情報が伝達される性格のものではないことが、検討によって再確認された。

町方の情報も武家方の情報も、基本的には幕府によって集積され、その後何らかのルートで横に流れているため、ここで被害情報が錯誤したとは考えにくい。とすれば、武家方から幕府に提出された情報が正確

でないか、もしくは意図的に歪められた情報が提出された可能性が考えられる。

また、「秘日記」の記録者は、延焼地の情報についてある程度正確に把握していたことは既に述べたが、地震後の混乱がある程度落ち着いてからも、「秘日記」には火災記事の記載が細くなされていることにも気づく。これは、火災の多かった江戸において火災情報は何よりも優先して伝えられるべき情報であったことや、火災の被害は外部から確認できてしまうことなどが理由として挙げられよう。

最後に「秘日記」について述べる。一般的には、自藩邸内の被害情報についても、身分や役職によって触れることのできない部分も多かったと考えられる。「秘日記」の記録者は上屋敷詰の兄を持っており、また、「認物」「書物」といった言葉が日記内に頻繁に見られるように、藩内の情報に触れることのできる役職に就いていたことなどから、弘前藩邸内の情報に精通し得たと考えられる。

そのような情報の中でも、異国船の動向や蝦夷地警備について詳細に記されている。このような記述からは、記録者の対外的な危機意識が垣間見える。同様に承祐の逝去記事や、震災の記録などを意識的に書き留めておく様子からは、日本や弘前藩の行く末を憂える藩士の姿を見ることができよう。

さらに、安政江戸地震の地震誌類は、江戸の人々が記したものが殆どである。そのような中で、江戸にやってきたばかりの彼が直接現場を見て得た情報や、実体験にもとづいて記した情報が含まれていることが、「秘日記」の一つの特徴となっている。また、「秘日記」を読んでいくと十一月以降の記述は至って平常そのものに戻りつつあることが分かる。藩邸見廻りの仕事をして、仕事が終われば、同僚や「兄様」と「一盃催」し、夜中に帰宅する。帰りに屋台か何かであろうか「雑煮」を食べるなどの記載も見られる。しかし、復興ということを考えたときに、史料の記述が平常通りに戻ったから生活が元に戻ったのだと考えるのは聊か早計である。

この「秘日記」は安政二年の末日までのものである。このまま復興を遂げるかに思われた弘前藩江戸藩邸であるが、江戸の町はこの翌年安政三年八月に、さらに大風の被害に遭ったことが分かっている。弘前藩の復興について考えるとき、それは安政江戸地震を単発の災害として考えるのではなく、いくつかの被害が重複した複合的・重層的な災害として認識する必要がある。復興までの過程を考えていく必要がある。

付記 本稿の作成にあたり、長谷川成一先生にご指導いただきました。北原糸子先生には様々なご教示と、査読の際には丁寧なコメントをいただきました。中村操氏、西山昭仁氏、市毛幹幸氏、土谷紘子氏、岩森讓氏、澁谷悠子氏には、色々とアドバイスをいただきました。林豊氏にもご意見をいただき、原稿改訂について大変お世話になりました。末尾ながら、記して感謝申し上げます。

註

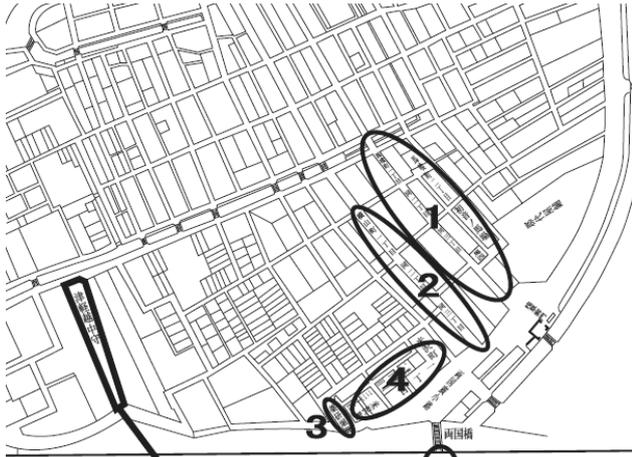
- 1) 造酒屋山一金木屋又三郎(武田正三郎敬之)のこと。『金木屋日記』は又三郎が弘前近郷の賀田(現岩木町賀田)在住時のもので、金木屋は家老職大道寺家や諸役人と交流があったため、津軽家中の記事も多く、安政江戸地震以外にも、小田原地震の情報など各地の災害情報を確認することができる。内容の多くは斎藤(1995)によった。
- 2) 内閣文庫所蔵史籍叢刊第十四巻『諸向地面取調書』(一)、46頁。『諸向地面取調書』は江戸市中にある大名や幕臣の武家屋敷調査書である。安政三年成立と考えられている。
- 3) 「御殿空間」と「詰人空間」は吉田伸之氏の論考による。この二重空間は、東京大学構内で発掘された加賀藩江戸藩邸跡からも明らかになった。「御殿空間」はさらに公用の表向と藩主やその家族の生活空間である奥向に大別される。

文献

- 北原糸子, 2000, 講談社学術文庫 地震の社会史, 講談社.
- 北原糸子, 2003, 近世災害情報論, 塙書房.
- 長谷川成一, 2004, 日本歴史叢書[新装版] 63 弘前藩, 吉川弘文館.
- 内閣府中央防災会議, 2004, 一八五五 安政江戸地震報告書.
- 佐山守, 2004, 安政江戸地震災害誌, 上巻, 海路書院.
- 宮崎勝美, 1994, 大名屋敷の境界措置—表長屋の成立とその機能—, 武家屋敷, 山川出版社.

史料

- 「秘日記」
(弘前市立弘前図書館蔵岩見文庫, GK 215-70)
- 「弘前藩庁日記 江戸日記」
(弘前市立弘前図書館蔵津軽家文書, TK 215-2)
- 「弘前藩庁日記 国日記」
(弘前市立弘前図書館蔵津軽家文書, TK 215-1)
- 「御上屋鋪惣御絵図面」
(弘前市立弘前図書館蔵津軽家文書, M17)
- 「添田儀左衛門日記」(弘前市個人蔵), 弘前市史編さん室編, 2000, 新編 弘前市史 資料編 3 近世 2, 弘前市.
- 「旅籠帳」(弘前市個人蔵), 弘前市史編さん室編, 2000, 新編 弘前市史 資料編 3 近世 2, 弘前市.
- 「金木屋日記」(弘前市立弘前図書館蔵八木橋文庫), 斎藤昭一解説・編集, 1995, 山一金木屋又三郎日記 抜粹編, 株式会社青研
- 「諸向地面取調書」(内閣文庫蔵), 1982, 内閣文庫所蔵史籍叢刊 第一四巻 諸向地面取調書 (一), 汲古書院.
- 「安政地震焼失図」(内閣神宮文庫蔵), 東京大学地震研究所編, 1982, 新収日本地震史料 第5巻 別巻 2-1, 日本電気協会.



◀ 図1-1 両国周辺位置関係図

(『嘉永・慶応 江戸切絵図』所収「日本橋北内神田両国浜町明細絵図」を参考に作図)

浜町中屋敷

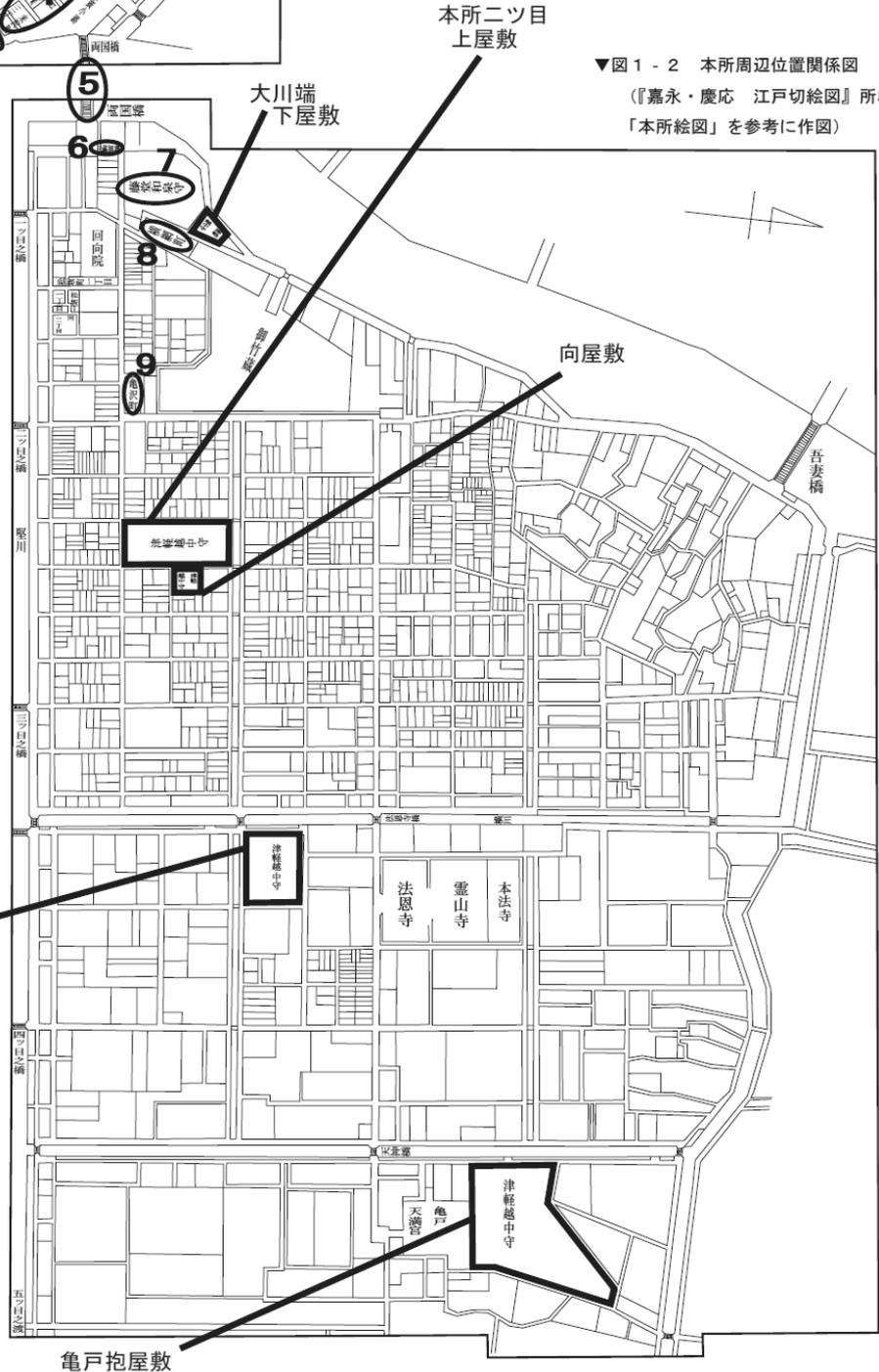
本所二ツ目
上屋敷

▼ 図1-2 本所周辺位置関係図

(『嘉永・慶応 江戸切絵図』所収「本所絵図」を参考に作図)

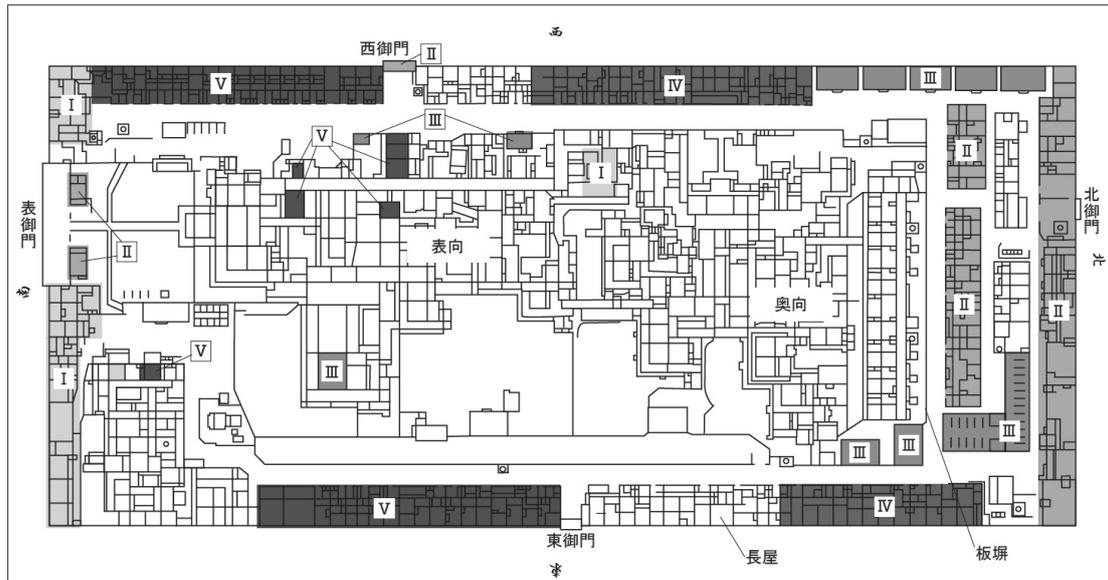
- 止宿所 (馬喰町)
～大川端屋敷
1. 止宿所 (馬喰町)
 2. 横山町
 3. 薬研堀
 4. 米沢町
 5. 両国橋
 6. 駒止橋
 7. 藤堂和泉守中屋敷

- 大川端屋敷
～本所二ツ目上屋敷
8. 横網通
 - (7. 藤堂和泉守中屋敷)
 9. 亀沢町



本所三ツ目
(横川端) 中屋敷

亀戸抱屋敷

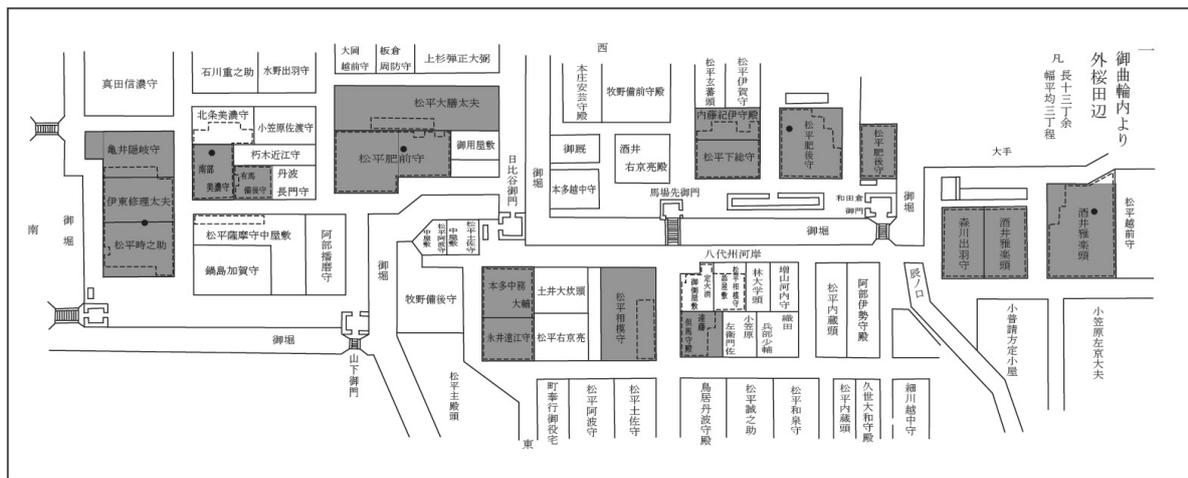


▲図2 「御上屋鋪惣御絵図面」(弘前市立図書館蔵津軽家文書) トレース図

※ 「所々」など、特定の地点を示さない表現の場合は、図中に記さなかった。

▼図2凡例

濃・潰懸	V
半潰	IV
大破	III
痛損	II
破損	I



▲図3 「安政地震焼失図」 1, 御曲輪内より外桜田辺

(『新収日本地震史料』5巻別巻2-2 所収のものを改変)

▼図3凡例

延焼範囲
「秘日記」で記された延焼地点

図1-1、図1-2

『嘉永・慶応 江戸切絵図』
(人文社 1995年)

図2

弘前市立図書館蔵津軽家文書「御上屋鋪惣御絵図面」

図3

『新収日本地震史料』第五巻別巻2-1

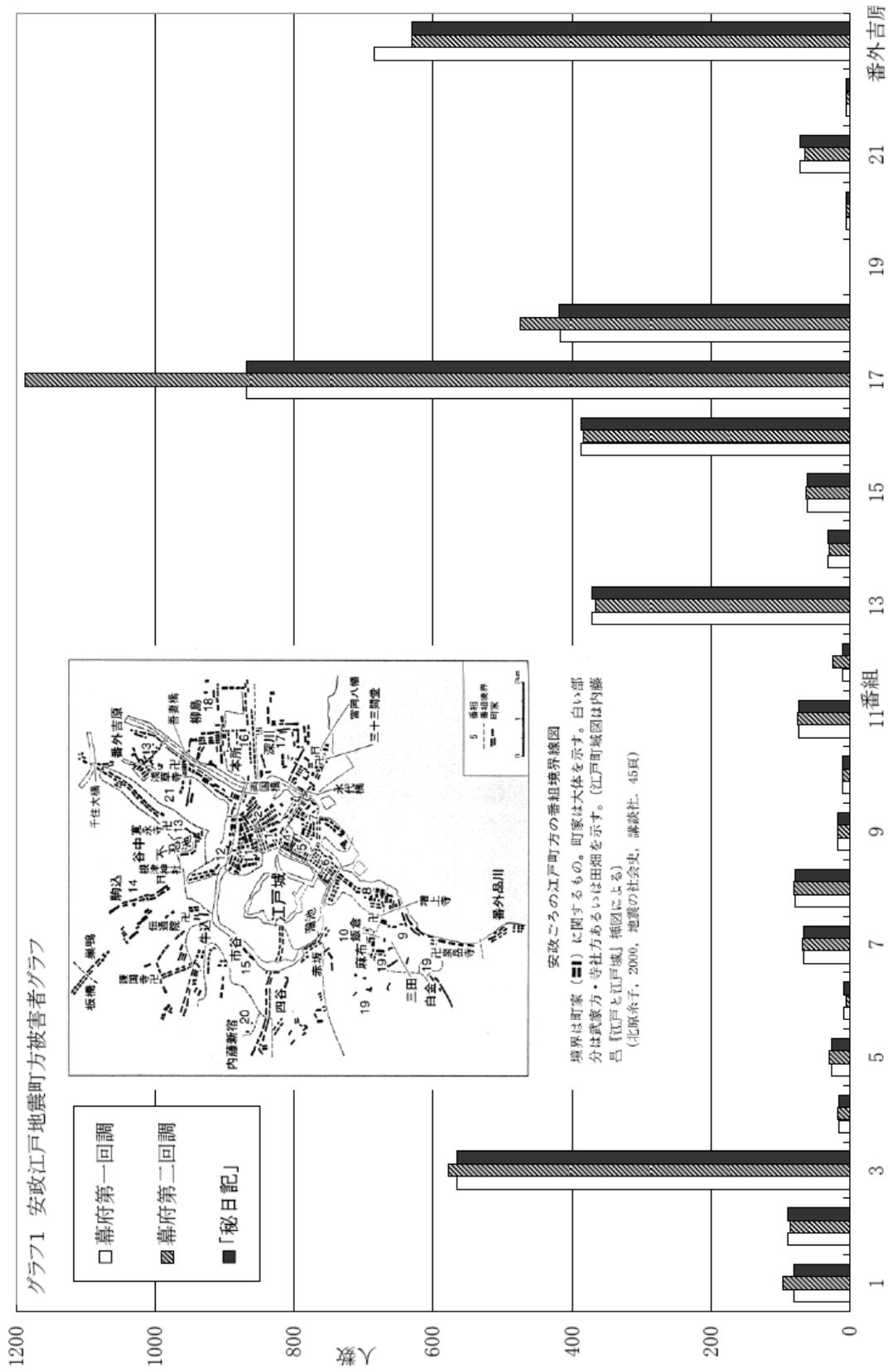
(日本電気協会 1985年)

※ 図1~3・参考図は、全て北が右側にある。

別表2 安政江戸地震江戸町方被害

番組	被害者										倒壊家屋(潰家)				倒壊土蔵			
	幕府1					幕府2					幕府1		秘日記		幕府1		秘日記	
	死者	男	女	死者	男	女	死者	男	女	死者	男	女	(軒)	(棟)	(軒)	(棟)	(軒)	(棟)
1	81	41	40	96	81	41	40	133	133			133	23	23			23	
2	89	31	58	86	89	31	58	185	185	61	61	185	57	57			57	
3	566	263	303	578	566	263	303	1047	1047			1047	41	41			41	
4	15	7	8	17	15	7	8	42	42	3	3	42	7	7			7	
5	27	10	17	29	27	10	17		66	66	66	8	8			8		
6	8	6	2	5	8	6	2		6	6	6	5	5			5		
7	67	19	48	69	67	19	48	156	156			156	26	26			26	
8	79	42	37	81	79	42	37	494	494			494	63	63			63	
9	18	5	13	18	18	5	13	115	115			115	10	10			14	
10	11	5	6	10	11	5	6	29	29			29	0	0			0	
11	73	28	45	75	73	28	45	154	154			154	32	32			32	
12	11	5	6	24	11	5	6		66	66	66	6	6			6		
13	372	161	211	366	372	161	211		1525	1525	1525	138	138			138		
14	31	12	19	30	31	11	19	743	743			741	19	19			19	
15	62	25	37	63	62	25	37	337	337			337	39	39			39	
16	387	169	218	384	387	169	216	2307	2307			2307	116	116			116	
17	868	453	415	1186	868	453	415	4903	4903			4903	785	785			785	
18	417	189	228	474	418	189	228	3415	3415			3415	22	22			22	
19	0	0	0	0	0	0	0	5	5			5	0	0			0	
20	5	3	2	5	5	3	2	4	4			4	1	1			1	
21	72	36	36	65	72	36	36	254	254			254	1	1			1	
番外 品川	6	3	3	6	6	3	3	18	18			18	0	0			0	
番外 吉原	685	118	567	630	630	103	527	5	5			5	1	1			1	
計	3895 (3950)	1616 (1615)	2279 (2277)	4293 (4297)	3895 (3896)	1616 (1615)	2279 (2277)	14346 (14346)	14346 (14410)	1724 (1727)	1724 (1662)	14346 (14410)	1404	1404			1404	

幕府1:幕府初回調(佐山守『安政江戸地震災害誌』上, 2004, 海路書院, 11頁.)
 幕府2:幕府次回調(佐山守『安政江戸地震災害誌』上, 2004, 海路書院, 11頁.)
 秘日記:「秘日記」安政二年十月二日条



グラフ1 安政江戸地震町方被害者グラフ